

20世紀を代表する経済学者の一人であるヨーゼフ・シュンペーターの有名な言葉に「創造的破壊」というものがある。経済の成長の原動力はイノベーション(技術革新)であり、それは旧来の産業や秩序を破壊し、新しい物を生み出すことで経済成長を促すというものだ。新しいものが生まれて発展することで経済は進化を続けるが、そのためにはこれまでの仕組みが破壊される。

近年の米国経済では、こうした動きが顕著である。GAFAMはグーグル・アップル・フェイスブック・アマゾン・マイクロソフトを総称したものであるが、このGAFAMだけで米国株式の拡大の大半を実現している。GAFAMの存在がなければ、今の米国経済の繁栄はあり得ない。実際、30年あるいはそれ以上続いている大企業の多くは成長が止まっているか、中には破綻した企業も

学習院大教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

少なくない。

GAFAMの成長の陰で、多くの企業が破壊されている。アマゾンのビジネスモデルでデパートなど旧来の小売業の多くが苦境に陥り、グーグルやフェイスブックのビジネスモデルは広告業界などを圧迫している。アップルはスマートフォンで携帯電話のビジネスを激変させ、音楽や映像などのビジネスも大きく

創造的破壊型の経済成長

変えつつある。

GAFAMの特徴はベンチャーからスタートしたことであり、その後急速な成長をした。GAFAMを追いかける存在として、巨大な規模になったベンチャー企業が何社もあつて、これらをユニコーン企業という。よく知られているところでは、ネットフリックスやウーバーなどがあ

る。こうしたベンチャーは社会にとつてなくてはならない存在となつていく。新型コロナウイルスに対するワクチンの開発が遅れたら大変なことになったが、ベンチャー企業による開発がワクチン開発の起爆剤となった。食料問題や地球環境問題などの重要な社会課題を解決する存在としても、ベンチャーに寄せられる期待は大きい。

こうした米国での流れと比べて、日本は大きく後れを取ってしまった。ベンチャーの成長が経済拡大の原動力となるという流れに乗り遅れたのだ。教育制度、旧来の大企業が支配する雇用市場、人々の保守的な考え方、資金市場の不活性など、さまざまな要因が重なつてこうした事態に陥ってしまった。ただ、こうした

た事態は放置できないということ、多くの人がベンチャーの重要性についての声を上げ始めている。政府の中でも創造的破壊型の経済成長を促進する政策が検討されている。

若者の中にも、ベンチャーにチャレンジしてみようという人が少しではあるが増え始めている。私の教え子の中にもベンチャーから立ち上げた会社を上場させ、100億円規模のビジネスを運営している女性もいる。その他、大企業や官庁を飛び出してベンチャーにチャレンジしている教える子も10人を超える数となっている。若者の人生選択では、ロールモデルの存在が重要だ。ベンチャーで成功した人の周りには、ベンチャーの世界に飛び込む気持ちを持つ若者が集まってくる。日本でもベンチャー興隆の流れが本格化することを期待したい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。